

テーマ：これからのこども学への期待

(吉岡 眞知子)

本来、シンポジウムはシンポジストのご意見を聞きつつ、参加者各自がその内容を受け取り考えていくことであると思ひ、あえて「まとめ」をするものではないと思ひます。しかし、シンポジストの皆様から、「こども学」が「幼児教育」「児童学」とは異なりその独自性をもった学問として確立していくための提案をいただき、ありがたく学ばせていただきます。

1. 日中の幼稚園教育の中での「子どもの遊び」を例に、その教育目的の違いを示していただき、「日本の中の子ども」の姿だけでの研究ではなく、国際的な視野をもち、他国の研究から学ぶ「こども研究」であることを教えていただきました。その意味では、今後も上海師範大学との学術交流をより深めさせていただきたく思ひました。

2. こども学研究は学際的に進められるものであること。

「こども学」の学問を確立させるために、方先生がおっしゃいました、上海師範大学では「子どもに直接かかわる学問分野」と「子どもにつながる学問分野」における研究と組織体制づくりをされ進まれていることに、改めて触発され刺激を受け、本学も原点に戻り研究していきたく思ひました。

3. 人間学の研究をこども学に

「こども学」は人間学としての位置づけを持つということでは、私も上海師範大学でのシンポジウムで話させていただいたかと思ひます。そのために、人間哲学の世界的先行研究に学ぶ研究が必要であることを提案していただきました。

日本では1972年大阪大学に「人間科学部」が設置されたのを機に Human Sciences の研究が各地で広まってきたかと思ひます。これは、人間自身を対象にした多種多様な学問領域から研究する学問であります。その人間の出発である「こども学」は、こうした人間学の研究に学ぶところは大きいかと考えます。さらに、学際的学問研究が必要であることを確認いたしました。

これらに加えて

4. 今後の「東大阪大学」における「こども研究」の方法（手法）として次のことを大事にしていきたいと考えています。

- ① 当事者（子ども、子どもと共に生きている親、子どもに関わる地域社会とそこに生きる人々）の声を聴き、その生活史をたどりつつ研究する、生きた人間が研究対象であるからその当事者の現実からの研究を大事にしていきたいと考えます。その研究手法として、実験室や観察室や相談室ではない「こども研究センター（生活に

基づく研究)」研究展開を進めていきたいと考えます。今後も、地域に根差した子ども研究として、地域の方々から学びつつ研究を進めていきたいと考えます。

- ② 子どもを援助する人たち（親をはじめ、福祉、医療、教育、文化、社会等々といった領域の実践者）と共に研究できる組織体制を作る。実践に裏付けられた質的研究を進める上でも、本学こども研究センターがそれぞれの学問領域の実践者とつながり研究ができればと考えております。